



青森市油川の子供ネブタ合同運行
(2008年7月29日・清野撮影)

ネブタの夏が終わわり9月に入ると、青森も一年で最も過ごしやすい稔りの秋を迎える。が、「あどほだり」というわけで、ネブタの話に今少しおつき合いの程を

お願いしたい。現在、青森市の「青森ねぶた祭」は知名度も全国的に定着した感がある。最近、この大きな「ねぶた祭」に

う名称を聞く機会が増えてきた。「地域ネブタ」の名称は、完全に定着したわけではないが、特に青森市においては「ねぶた祭」が、必ずしも地域に根ざした祭りとは言い難くなったことの裏返しで用いられているのかも知れない。

「ねぶた祭」が戦後、積極的に観光化を進め、大きく変貌を遂げながら発展し

「地域ネブタ」の復活

清野 耕司

(県民生活文化課 青史編さんグループ 主幹)

ていく中で、町内会などの地縁的なつながりを基盤として組織された「地域ネブタ」は、昭和30、40年代にかけて一旦姿を消したといっても過言ではない。これは、大型ネブタ(灯籠)が主流となり「ねぶた祭」の母体が、旧青森市街地の各町から企業・同業者組合・官公庁や公益団体に取って代ったことが、大きな要因と考えられる。

また復活ではなく新興の団地において新たに始まった例もある。現在では60に近い新旧の「地域ネブタ」が、7月後半から8月前半にかけて独自にネブタを運行している。

そのような「地域」の一つ、青森市油川地区は、江戸時代以前から港町として栄えた地域で、大浜とも呼ばれていた。ネブタについては、享保15年(1730)に大浜で「ねぶた」が行われた記録がある。昭和初期には青年団による大人ネブタと当時の尋常高等小学校的生徒等による子供ネブタが盛んであった。子供ネブタは、当時の油川町の各町内ごとに子供達が集まり、新暦の8月5日・7日に自作の人形ネブタを担いで回った。7日には人形ネブタの胴体だけを船に乗せ、沖に漕ぎ出し海に流したという。大人の援助も少しはあったが、上級生がリーダーとなつて、資金集め・材料の調達・人形ネブタの製作から運行まで、ほぼ子供達だけで運営されたネブタであった。昭和30年代前半には消滅の危機にさらされたものの、現在では、復活したネブタが6、7の町内会ごとに運行され、毎年7月29日には「油川子供ネブタ合同運行」が行われるほどになっている。

このように、最近の青森市では「地域ネブタ」も元気なのである。